

「ア、そうかいなア。」

「頼りない奴やなア。手に出刃庖丁を持つてる。あぶない。喜イ公、早う取り。」

「源やん、出刃やない、摺子木や。」

「清八や。摺子木を振り廻してるのや、放せ、どうしたんや。」

「源やん。俺は口おしい。」

「清八や、泣いてるな。男が泣くのはよくせきの事や。一體どうしたんやいな。」

「オイ、源やん、喜イ公等はどうか云ふ事情で貰ふたか知らんが。俺は此の起請に就いては一通りや二通りやないね。」

「そんなら貴方はんのは餘程念が入つてまんのんやな。」

「何を吐かしてくさんね。……源やん話をせんと解らんがな。去年親方の仕事で堺へ行てたんや。仕事の手張つて歸るのがおそうなつた。一杯飲んだ處からぶら／＼素見に行たと思ひ。上つとくはれと云はれて上つた、その時買ふのが彼奴や。初會から惚れたとか嫁はんにして呉れとか、程の宜い事を云ひよる。うまを合はして二三遍行たと思ひんかいな。去年の暮の事や。仕事から歸つて來ると、路地の横手から手招きをする女がある。行て見ると彼奴や。貴方の嫁はんにして貰ひに來たと云ふので俺はガクツときたで。今お内へ入れて貰へん事は宜う知つて居るわ。實は貴方に逢ひた

いが爲に、大阪へ仕替を取つて來のや。種々話がある依てに、今晚何處其處まで來て呉れ。宜しやと早速其晩行たと思ひ。なんと俺の顔を見るなり二十圓の無心や。貴方にこんな事を云ふて濟まんねけども、二十圓ないと如何する事も出來んね。仕替を取つてお金も掴んだけども色々要つて仕舞ふた。他に頼むお客さんも澤山有るけども、他のお客さんに頼んだら、貴方と世帯する時の足手纏ひや依てにどうぞ諾いて呉れと云ひ依る。俺もよしやと引請けたが二十圓の事は倍て置いて五圓の苦面もつかん。そこで俺の妹が上町に奉公を仕てるので、妹の處へ行て空涙をこぼして、妹。實はお母んの病氣や。お醫者はんに見て貰ふた處が、今度はどうも六ヶ敷いと云はれるので、どうぞしてもう一遍元の體になりまへんかと云ふたら、ならん事は無いが、これには人參といふ高藥を盛りねばならぬ……。」

「オイ清やん。俺いが眞面目で聞いて居るのに芝居をする奴が有るかいな。」

「妹。なんとかならぬもんやらかと云ふたら妹が、兄さん妾に甲斐性が無い依てに、あんたにこんな苦勞を掛けまんね。待つてとくなアれやと内らへ這入つて持て來た風呂敷包。嵩こそ高いが木綿物ばかり。六一屋へ持て居つたら六圓七十錢しか貸して呉れへん。また引返して行たら、そうチョイチョイと男が呼出しに來る様では餘な事が出來たんやなからうと足が上りかゝつたので、實はお母はんの病氣で兄さんがこれ／＼と、打明けて云ふたら、親方も良い人で給金を先貸しして呉れば